

# 利根川あわれ

## 利根川 裕

作家の瀬戸内晴美さんは、徳島の出身である。あるとき、

「瀬戸内晴美はペンネームですか」

と聞いてみたら、

「ペンネームだったら、わざわざこんなワザトランシイ名前をつけるもんですか」

とやや抗議ふうな答が返ってきた。

私の利根川も、正真正銘の戸籍名である。瀬戸内さんは姓と出身地がぴったり一致しているが、私の場合、関東平野を流れる利根川とは地理的關係はない。私のうち

は、家系だの系図などという由緒ありげなものとは無縁だから、利根川という姓の由来については、いっさい知るところがない。

ところで先ごろ、機会があつて利根川流域を気ままにめぐつてみた。私としては、天下に名だたる大利根川との、これが最初

のご対面である。ご対面といっても、なにしる相手が全長三二二キロの怪物であるから、とても全容を見わたすなんて芸当はできっこない。まあほんの数カ所たちよつて長年のご無沙汰をお詫びしたにすぎない。

幕末の医師赤松宗旦の『利根川図誌』は、その第一行目に、

「利根川は本源を上野ノ国利根郡藤原の奥なる文珠山に発す」

と記している。しかし地図のうえでは、文珠山などという山はない。まるで神話時代の話のようなものである。水源がほんとうにつきとめられたのは、やつと大正十五年（一九二二）八月になつてのことである。

さて、ここに源を發した利根川が延々と流れて、千葉県銚子市で太平洋にそそぎでることは誰でも知っているが、悠々千古の

むかしからそんなふうに流れていたわけはない。こんなかたちになつたのは、たかだか四百年ほど前のことであつた。それまでの利根川は関東を縦に流れて、そのまま現在の隅田川河口付近から東京湾に落ちていたようだ。

それを無理矢理北へ押しあげ、東へねじまげたのは、江戸をひらいた徳川家康であつた。この案を具申したのは、伊奈備前守忠次。

なぜこんな反自然的なことをする必要があつたのか。一つは、江戸を水害から守るためである。また東北諸勢力の江戸侵攻にそなえて川による防禦線を構想したふしもある。さらには水運による交通革命も考えたらうし、新田開発の必要もあつた。

利根川を渡良瀬につなげ、さらにそれを鬼怒川につなげば、川はやがて太平洋にそそぐであろう。伊奈忠次は上・中流に六本の運河をつくり、二本の旧川をつぶした。クワとモッコによる大工事が六十年もつづいた。そして、たしかに利根の水は銚子河口に流れてたのである。

しかし、この治水は成功だったか。とんでもない。氾濫と干害はくりかえしこの流域を襲う。安永、天明年間の氾濫の記録によると、水は一挙に江戸まで押しよせ、將軍の部屋の前のはげまでがひっくり返されている。

利根が暴れるのは、もともと通りたくもない人工水路を、むりやり通らされているからである。英語で川は女性名詞にあたるが、この女性の復讐欲はつよい。

いまの利根の流れを育てた親は、大自然ではなく、人間という養父母であった。利根川はこの反自然的な親にむかって、執念ぶかい造反をくり返す。

この女の狂気に手を焼いたのは、徳川時代にかぎらない。明治十八年から昭和五年までの、四十五年間にわたる大治水工事も、なんども決潰氾濫のしつぱ返しをくわされている。

一昨年(四十六年)に、銚子河口から十八・五キロ上流のところに、利根川河口堰が完成した。堰は潮の干満に応じて、一日に四回作動する。海水の逆流をふせぎ、し

かも水道や工業、農業用水を確保するためである。利根はここで流れを止められ、調節される。

当局の説明によると、この堰の完成で、多年念願としていた源流から河口までの一貫水資源開発構想が一段落したことになるのだ、とか。これで、彼女のヒステリーはおさまってくれるのだろうか。おさまるのかもしれない。しかし考えてみれば、こうまで人工的に調節された利根川は、もはや川としての生命力にとどめを刺された、というのではないか。川はすでに死んだ。

そういえば、利根川には大河がそなえているはずの格調というものが無い。信濃川の中、下流を私はある程度知っているが、そこにはすぐれた生きものの持っている堂々たる風格がみられる。しかし、ほぼそれに拮抗する大河である利根川は、どことなぐ下品で、しかもわざとらしく気兼ねしている。

罪はむろん、本来の利根川にはない。人間たちによって、本来の意志を抑えつけられ、ねじまげられた結果である。つまり

は、つくりもののかなしさである。

「おれは河原の枯れすき……」は、大正末年の不況とマッチして大流行歌となつていまにも伝わっているが、いかにもこの歌の河原は信濃川や石狩川でなくて利根川でなければならぬことを、私はこんどはじめて合点することができた。たしかに枯れすきがあつたから、なんていう理由ではない。つくりものとして出発した日本近代国家が、みせかけの膨張と好況(氾濫)のあとで迎えた根なし草のような荒廃と虚無は、なんと利根川とピッタリなことである。

利根川はあくまでも流れきろうとする意志をもぎとられている。流れない川などというのは、川の偽称ないし僭称ではないか。あわれ、わが利根川はいまや、偽わりの王冠のように、川という称号だけはかぶせられているものの、そのじつ、延々三百年にもまたがる巨大な沼沢ないし用水地と化しつつあるのである。こんな女に誰がした、と慨嘆して私は冬枯れの大利根からたち去った次第である。